いま、博物館に求められていること

利用者が学び、創る場に

これまで、博物館や美術館といえば、もっぱら展示物がずらりと並んでいる場所であると思われてきた。そして、入館者はそれらをおとなしく、しかも、往々にしてありがたげに鑑賞しなければならなかった。しかし、今日の博物館や美術館は、そうした陳列室状態をもはや脱しようとしている。利用者が主体的に学ぶ場へと変わりつつある。

なぜなら、高齢化社会の到来とともに生涯学習が重視され、博物館教育に対する社会的要請が高まっているからである。学校教育の現場で、総合的学習の時間が本格化し、さらに完全週5日制をひかえて、博物館教育への期待がふくらんでいるからである。

それでは、そうした社会的要請や期待に応えて、博物館や美術館が楽しみながら学ぶ場所として利用されるようになるにはどうすればよいのだろうか。この課題に取り組むため、去る1月20日、国立民族学博物館において博物館教育に関する日本で初めての本格的な国際シンポジウムが開かれた。英米の事例に探るという副題のとおり、国際的に著名な研究者2人が招かれ、逐語訳で話を聞いたあと、会場からの質疑と応答が行われた。全国各地から二百五十余人の参加者を迎えて、あらためて博物館教育への関心の高さがうかがわれたのだった。

米国ラーニングイノベーション協会のリン・D・ディアーキングさんは、人の一生を通じた学びについて理論的に整理するなかで、多様な選択肢から自分が学びたいと思う場を自由に選択して学ぶというニーズが高まっていると指摘した。そのニーズに応える場として博物館が重要だというわけである。

英国ビクトリア&アルバート美術館で教育部長をつとめるデイビット・H・アンダーソンさんは、具体的事例をいくつも紹介した。たとえば、スリランカなどから移ってきた女性たちは当初、博物館とはまったく無縁の人びとであったけれども、博物館側からの積極的な働きかけによって、彼女らの間で伝わってきた伝統的な技法をもちいた作品を主体的に作るようになったという。どの具体例をみても、利用者は単なる「鑑賞する人」ではなく、「創造する人」と化していたのであった。

昨年夏、国立民族学博物館で企画展についての理解を深めてもらおうと開かれたワークショップ。来館者が食べ物についての思いを粘土細工で表現した

小長谷有紀

これら二つの講演は、理論編と実践編の組み合わせであり、ともに利用者が学びの場の作り手であることを明示していた。もちろん、日本においても、たとえば俳句の会のように、年齢制限などのない自由な学びの場は存在する。しかし、一般に、教育機関に類する施設が、展示や広告などの自分たちの業務とみなしてきた表現行為を、利用者に全面的に委ねるところまで開放しているとは思われない。利用者の学ぶ力や創る力をいかに刺激するか、という教育プログラムの質がいま博物館に問われているのである。

けだし、わずか10歳の千と千尋も、11歳のハリー・ポッターも、学校でならただちに「子ども」扱いされてしまうだろうが、博物館ならば、彼らをほかの大人の顧客と同じように主体的な利用者とみなして、まねない学びの場を提供することができるかもしれない。少なくとも、学校とは別の形の学習を支援することはできるにちがいない。そんな期待をいだかせる国際シンポジウムであった。

（こながや・ゆき＝国立民族学博物館助教授・文化人類学）